

---

# SIREN -Spin-out-

直江省吾

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

S I R E N      - S p i n - o u t -

### 【コード】

N O 6 5 6 N

### 【作者名】

直江省吾

### 【あらすじ】

不吉なサイレンが響き、死した者たちが蘇る。とある寒村に迷い込んだ男女は異形の相手と対峙する。その先に待ち受ける真実とは。

## プロローグ

高校三年生の夏、俺は人を殺した。

相手は同級生。いわゆる不良だった。と言っても、進学校で偉そうにしていただけの小物だったが。

その当時の俺は人並み以上の正義感を持っていて絡まれてる同級生や後輩を助けたりしていた。だから、不良は常に俺を目の敵にしていた。

そうなると二人は一触即発。いつ殴り合いが勃発してもおかしくない関係だった。

きっかけは実に馬鹿馬鹿しいことだった。今思い出すと、自分がいかに子どもだったかわかる。

不良が俺の幼馴染に暴力を振るったのだ。

別に幼馴染といっても当時は疎遠で、廊下ですれ違っても挨拶すらない関係だった。

それでも俺は無我夢中で不良に飛びついた。周囲は大混乱だった。俺は、不良に泣かされてきた生徒のために拳を振るった。自分が受験生で、こんなことをすれば進学に不利だと知っていながらも止めなかった。無心だった。

どれくらいの間だっただろう。

我に返った俺が見たのは、目を剥いた不良だった。

鼻から気味悪い液体が垂れていた。

すでに人の温もりを失っていた。

幾度となく殴られた顔は骨が陥没して変形していた。

不良は死んだ。

それからの俺の人生は想像がつくだろう。特番の二時間ドラマのような展開だ。

優秀な日本の警察はすぐに現場に駆けつけ、俺に手錠をかけた。俺は留置場に入れられて取調べを受けた。すでに罪は確定しているので事務的で中身などあつて無いようなものだった。

そしてすぐに家庭裁判所で裁かれた。懲役は六年だった。

執行猶予など無い。

当時の俺は未成年、それも高校生だった。普通で考えればまともな実刑が下ることなどまずない。

当然俺は控訴した。だが、ある事実を知つてすぐに諦めた。

不良の父親が権力者だったのだ。

だから俺の判決が覆ることなどない。

絶望したかつて？

もう絶望する気にもなれなかった。

裁判官、裁判員、弁護士、検事。これら全てが敵ならまだわかる。権力者相手に逆らう馬鹿はそうそういないだろう。

だが、同級生が誰も味方をしなかったのは考えられなかった。助けてやった幼馴染すらも俺を助けることをしなかった。それどころか、幼馴染は敵になった。

俺が一歩的に暴力を振るつたと証言したのだ。

そこで俺の命運は尽きた。

後は六年間の刑務所暮らしだった。

風の噂によると、幼馴染は有名大学に推薦入学したらしい。

不良の父親は近々国会議員に立候補するらしい。

刑期を終えた俺がたどり着いたのは廃村だった。どうやってここまで来たのか覚えていない。最後に覚えているのは俺を担当してくれた親切的な刑務官の顔だった。

あの人は善人だったな、と俺が考えていると、  
「なんだ、あいつ」

10メートル程前方に人影が見えた。

最初は廃墟マニアか何かだと考えていたが、どうやら違うようだ。  
そんな服装<sup>ナリ</sup>ではない。

しばらく見ていると人影が振り向いた。俺に気がついたようだ。

「すみません、ここはどこでしょうか？」

右も左もわからない俺は人影に尋ねた。だが、返事は無い。

「すみ」

聞こえなかったのかと思い、もう一度声をかけようとした俺は言葉  
を失った。

(おかしいぞ……。どうして……)

人影は男だった。いや、正確には。

全身に振り返り血を浴び、右手に鉈を持っている中年男性だった。

男は奇声を発しながら鉈を振り上げた。

終了条件 屍人を倒す

あれは明らかにオカシイ。

刑務所には薬物中毒者がごろごろいたが、あれとはベクトルが違う。

「人間じゃねえな……」

あの男は何一つ迷うことなく、俺に鉈を振り下ろしてきた。

かろうじて避け、なんとか逃げている最中だが、あそこの角から現れるかもしれないという恐怖は半端じゃない。あの目を境に、精神力だけは自身があっただけど、今は混乱しまくっている。

「くそ……。ありえねえ……」

俺は手ごころな廃屋を選び、人がいないことを確認して進入した。崩れそうだが隠れることはできそうだ。

「とりあえず、護身用に……」

周囲を見渡したがロクでもないものばかりだ。家の一部だっただろう木はどれも腐って脆く、到底武器にはできない。そうでなくても短かすぎて心もとない。

「しかたねえな……」

しばらく考えて、俺はズボンのベルトをはずした。ウエストぎりぎりだったため、ずり落ちることはなかった。

俺は手にしたベルトを軽く振った。先端のバックルがガラスを簡単に粉々にした。

「よし、使えるぞ」

軽く振っただけでガラスを割ることができくらいだ、手加減せずに使えば十分な武器だ。これがあれば、あの男に遭遇しても大丈夫だな。

武器を持って少し強気になった俺は廃屋を出た。出る際に通った

玄関で手紙を拾った、気になったので見てみると、消印は数十年前だった。

その時、背後に気配を感じた。

「来たな……」

物音がすると俺は振り返った。さっきの男が立っていた。

「化け物野郎……」

男は言葉にならない言葉を発しながら襲ってきた。動きこそは緩慢だが鉈をもっているのと、とりあえず距離を置いた。ベルトを武器にするならある程度の間合いが必要だ。

俺は十分に引きつけ、それから猛攻撃を加えた。

「おらあ！ 死ぬ、この化けもんがあああ！」

数年間の刑務所生活の鬱憤を晴らすかのように俺は容赦なく叩いた。バツクルが皮膚を裂き、しだいに血と混じりながら肉が飛び散る。最後には鈍い音がした。

「はあ、はあ……」

俺が手を休める頃には、すでに男は死んでいた。身体のうちこちが陥没していて骨が折れている。飛び散った肉が周囲に散乱し、腐った食材のような激臭がする。

「二人目だな……」

人生二度目の殺しを自覚しながらも、俺は後悔などしていなかった。一仕事終えた疲労感だけが残っていた。

俺はその場に座り込み、改めて自分の所業を確認した。やはり、特に感想など湧いてこない。

一度人を殺せば、故意であろうとなかろうと、人の命には無関心になってしまうのかもしれない。もしくは俺が特別なのだろうか。

「行くか……」

いつまでも殺人現場（トコロ）にいるわけにもいかない。俺は立ち上がり踵を返した。

どこからか音が聞こえる。

「何だよ……」

一瞬はパトカーのサイレンが何かだと思ったが、もっと低い音だ。それはどんどん大きくなる。

「一応はサイレンだよな うっ！」

突発的に頭痛に襲われた俺はその場にうずくまった。同時に普段では見れない光景が見えた。

「俺の……背中？」

見えたのは紺色のTシャツを着ている中肉中背の男だった。間違はなく俺だ。だが、これはだれの視界だろう。気になった俺は頭痛を堪えながら振り返った。

そこには。

「嘘だろ……なんで……」

そこには、殺したばかりの男が立っていた。男は折れたはずの腕を振り上げた。不意をつかれた俺は避けきれず、肩に鉈の一撃をもらった。

「おい、嘘だろ……。さっき、お前死んだだろ……。くそ野郎……」  
俺は消えそうになる意識の中で悪態をついた。

小栗大典 一 目 16時47分56秒 宵次集落（後書き）

武器アーカイブ？27 ベルト（バックル付き）

強さ 普通

分類 軽い打撃武器

詳細 出所の際に支給された大量生産の安物。外国製。

ムチのように使用可能。

伊勢崎直哉 一日目 17時18分46秒 宵次集落

真つ赤になつている川を見下ろしながら、伊勢崎直哉いせさきなおやは欄干に座つていた。周囲からは物音すらせず、真つ赤な水が流れる音だけが聞こえる。太陽はかなり傾いており、少しの間にまた暗くなつてきた。

「俺が来たのは正解だったな」

独り言を呟く彼の隣には人間が一人と、化け物が一人倒れている。いづれも男性だ。化け物は、少し前に襲われた際に殺した。倒れている人間は、その化け物に襲われたようだ。鉈で傷つけられた肩は、それほど重症だったわけではないが一応は手当てをしてある。

「う、うっ……」

顔を歪ませながら人間である男が目を覚ました。しばらくは状況が理解できないようで混乱していたが、伊勢崎を見ると表情を凍りつかせた。立ち上がりもせず逃げようとするが、ただ足が土を蹴るだけで進まない。

見かねた伊勢崎は手を差し出した。

「おい、俺は化け物じゃねえぞ」

「ほ、本当か……」

思いのほか声音は冷静だった。脅えているようだが視線はぶれていない。伊勢崎は少し関心した。

「おら、さつさと立て」

手を掴み、無理矢理立ち上がらせた。ここに運んだ時もそうだったが、なかなか健康的な男だ。適度に筋肉もついていて無駄が少ない。

「あんた誰だ？」

「お前こそ誰だ？ 命の恩人にタメ口か？」

「俺は、小栗太典だ。ここはどこだ？」

「普通は、俺の名前を聞くだろ？ とりあえず座れよ」

伊勢崎は欄干を叩いた。太典は素直に従った。

「俺は、伊勢崎直哉だ。仕事でこの村を訪れたところだ」

「仕事？」

「某企業の代表取締役 要するに社長だ。ちなみにこれが名刺いぶかしげな表情の太典は名刺を渡された。それには確かに『社長』という役職名と伊勢崎の名前が書かれている。人材派遣を行う企業のような。」

「人材派遣って、誰でも紹介してくれるのか？」

「あ？ まあ、登録してある人ならな。って、そんなことよりも大事なことがあるだろ？」

自分が血祭りあげた化け物の死体を、伊勢崎は指差した。太典からすれば自分が殺して、すぐに自分を殺そうとしてきた化け物だ。「お前、俺を殺したのか？俺が殺した後に見てみたら、体中の骨が折れそうだったぞ、内臓も二個くらい破裂してたし」

伊勢崎はつま先で死体を裏返した。折れた骨の一部が身体から飛び出していた。そうでなくても全身が血まみれだ。

「ああ、殺した俺はまた捕まるのか？」

「捕まらねえよ。こいつ人間じゃないからな」

「人間じゃない？」

太典は聞き返した。いきなり殺そうとしてきたり、行動こそは化け物だったが、彼からしてみればまだ人間だった。だが、伊勢崎は化け物だと言った。

「化け物だよ、多分妖怪の類だ。他にもわんさかいるだろうな」

「何でわかるんだ？」

「一度死んだ人間が生き返るか？ それにあのサイレン聞いただろ？ あれは機械音じゃない、生き物の鳴き声」

「生き物の鳴き声？ あんなに大きな声を出せる生き物がいるのか？」

あのサイレンがどこから聞こえたのかは知らない太典だったが、あれが相当な音量だったことは確かだ。あれだけの声を出せる生き

物となると、どれだけ巨大なのだろう。

「ああ、悪い。正確には、その声の主も化け物だ」

「……」

「ん？ どうした？」

「……馬鹿にしてるだろ」

「はあ？」

「俺がムシヨ帰りだから馬鹿にしてんだろ！ この世のどこに妖怪がいるんだよ！ 適当なことばかり言うな！ あれは人間だ！ 頭がおかしいだけの人間だ！」

冷静に振舞っていた太典だったが、精神的には限界だった。彼が刑務所に入っていたことなど、伊勢崎が知っているはずがないのに八つ当たりをして、その場から逃げようと走り出した。

「おい、待て」

「何だよ！」

強い声で呼び止められた太典はしかたなく振り返った。すると伊勢崎がペンライトと折りたたみナイフを差し出してきてきた。

「別に信じるとは言わない。だが、あいつらが危険だってことくらいは認識できてるだろ。もうすぐ日が落ちるから、護身用にもっていけ」

太典はしばらく悩んだが、自分が身を守る道具を何ももっていないことに気付いて、仕方なく受け取った。

「あんたはいいのか？ 素手だろ？」

「心配すんな、俺にはこれがある」

いつの間にか伊勢崎の右手にメリケンサックがはめられていた。それにはかすかに返り血が付着している。

「なら、いいけどよ」

別に心配したわけじゃない、そんな感じの口調だった。太典はそれ以上は言わず、伊勢崎も言わなかった。彼はしばらくは欄干にもたれているようだ。その姿は超えてきた修羅場の多さを感じさせる。少し嫉妬しながら太典は再び走り出した。

伊勢崎直哉 一目 17時18分46秒 宵次集落（後書き）

アーカイブ？12 伊勢崎直哉の名刺

解説

『人材派遣会社アギュー』と書かれた下に、会社の電話番号とメールアドレスが記載してある。

武器アーカイブ？7 メリケンサック

強さ 普通（使い手しだい）

分類 軽い打撃武器

詳細 伊勢崎直哉愛用の武器。これまで多くの妖怪を血祭りにしていたわくつき。

小栗大典 一日目 18時27分12秒 鬼守小学校

終了条件 鬼守おにかみ小学校からの脱出

伊勢崎とかいう社長と別れた俺は、当然行くあてなどなく村を彷徨まよっていた。途中で遭遇した化け物どもは、身を潜めて回避したり、それができなければ折りたたみナイフで殺した。考えてみれば、怪しい男だったが、ナイフをくれたことには感謝しておくべきだったかもしれない。

「……会えたらの話だけだな」

そんな先のことよりも、俺の目の前には解決すべき問題があった。集落を抜けてからたどり着いた小学校で一休みしていたところを化け物どもに発見され、倉庫に隠れたのはよかつたが退路を絶たれてしまった。

「せめて、化け物が何人いるか分かればな……」

そんなことを望んだところで、千里眼でもなければ無理な話だ。唯一の救いといえば、この校舎の内部をある程度知っていることくらいだ。化け物に見つかる前に興味本位で歩き回っていたからだ。

「どうすっかな」

貰ったナイフがあるが、リーチが短いので接近しなければ使えない。それにこれでは複数を相手にするのは難しい。拳銃とまで言わないが、せめてリーチ長い打撃武器が欲しい。場所が倉庫なので何かあるかもと調べてみたが、どれも役に立たないものばかりで、モップがあつたが持ち手が腐っていて壊れそつだ。何よりも大きくて持ち運びに適していない。

「……あれなら使えるか？」

何気なく見上げると、天井には照明が取り付けられていた。もちろん蛍光灯もはまっている。俺は藁わらにもする気持ちで立ち上がり、適当に足場を作って登り、蛍光灯を取り外した。

「意外と丈夫だな」

持ってみると以外にしっかりとした感触だった。さすがに殴れば割れてしまっただろうが、これなら割れた後でも刺すことができる。全部で四本だが、全て持ち歩けないので日本だけを選んだ。

「いつまで隠れてるわけにはいかねえしな」  
身を守るものは確保した。俺は覚悟を決めて倉庫の扉を開けた。

「はあ、危ねえ……」

肝を据えて倉庫を出たのはよかったが、廊下で化け物に見つかってしまった。倒そうとしてナイフを構えたが、相手の得物を見るなり、俺には根源的な恐怖心が芽生えてしまったようで、蛍光灯を一本落しながら逃げてしまった。

「あれは反則だろ……」

俺も刑務所で臭い飯を食っただけあって、常人よりも度胸はあるが、さすがに拳銃には腰が抜けてしまった。塀の中で極道者から話は聞いていたが、拳銃<sup>あれ</sup>には人間を威嚇する力があるようだ。

だが、これは同時にチャンスだった。あの化け物を殺せば、あの拳銃を奪うことができる。一応は進学校の生徒だった俺は、こんな時にこそ頭を使うべきだと思い、掃除ロッカーに身を隠しながら必死に策を練っていた。

「そついや、蛍光灯落として割っちまったな」

割れるときの音は意外と大きく、あの化け物も少しは動揺していた。その隙が無かったら、俺は撃ち殺されていたかもしれない。ならば、これを利用しない手はない。

「この一本でやってみるか」

今から倉庫まで戻るのは危険だ。ならば、今持っている蛍光灯で勝負をしなければいけない。俺はゆっくりと掃除ロッカーから出て廊下の様子を伺った。拳銃持ちの化け物は、水も流れていない水道

で手を洗う動作をしていた。今こそ好機だ。

「おつ、この箒使えそうだな」

何気なく掃除ロッカーを見てみると、先生が掃除で使う自在箒があった。持ち手の木は、倉庫で見つけたモップとは違いしつかりとしていた。リーチも長く、振り回すことが出来る。

「何だよ、どうして隠れるとき気付かなかつたんだ？」

あの時は焦っていたからだろう。周囲に気を配る余裕がなかったから、大切な武器を見落としてしまった。焦りは禁物だと言うが、まさにその通りだ。冷静になっていれば、この箒もすぐに発見できただろうし、冷静なら人を殺さずにすんだだろう。

六年前のことが脳裏を過ぎったが、すぐに忘れるようにした。今は感傷に浸っている場合ではない。

「大丈夫だ、冷静になれば出来るさ」

自分を鼓舞する台詞を少し大きな声で言い、俺は身構えた。

拳銃持ちの化け物は、俺には背を向けて立っている。視線は、数十メートル向こうの階段。定期的に振り返るようだ。俺は作戦どおりに蛍光灯を構えて、全力で投げた。化け物の頭上を飛び越えて、階段の近くで落下して割れた。

「よし、完璧じゃねえか」

割れた音は、静かな廊下には大きく響いた。それに反応した化け物は奇声を発しながら階段に走っていく。背後にはまったく注意を払っていない。

「死ねよ！」

興奮しながら割れた蛍光灯を見ている化け物を、俺は背後から蹴飛ばした。突然に不意打ちにバランスを崩した化け物は階段からおもちゃのように転げ落ちた。それでもまだ生きていたそいつを、俺は階段から跳躍した勢い利用して、手に入れたばかりの箒で串刺し

にした。ナイフを使って木を尖らせていたのだ。

狙ったわけではないが、筈は顔面を貫通していた。鼻があった場所に、空洞ができていて、化け物は即死だったようだ。拳銃を手から滑らせて動かない。

「うえ、グロいな」

人殺しの経験がある俺でも目を覆いたくなる死に方だった。常人なら嘔吐してもおかしくない。

だが、いつまでも目を逸らすわけにはいかない。ここまでして戦利品を逃すことはできない。俺は拳銃を拾い、弾薬を探すために持ち物を確認した。

「くそ、拳銃に三発、予備が二発かよ！」

警官が使用するような拳銃で、六発まで装填が可能な代物だ。俺は見よう見まねで装填してから自分のポケットに入れた。

「つて、何だこれ？」

もう一つ見つけたのは、泥や血で汚れた定期券入れだった。こんな田舎にもバスは来るのだろうか、そんなことを考えながら、一応中身を確認した。定期券はまだ有効のようだ、それにこれは大阪付近の電車のものだ。

「大阪？ それもまだ使えるつてことは、伊勢崎とかいうやつのか？」

俺はもう一枚のカードを見た。有名大学の職員証明書のようなものだ。

高校時代の俺じゃ逆立ちしても入れないような名門だ。顔写真と名前も印刷されている。

それは

「おい、嘘だろ……こいつ……」

高校時代と比べると大人になっているが、俺は一目で誰か分かった。忘れるわけがない。

裏切りの幼馴染を。

アーカイブ？10 酒井善一の学生証明書

解説

『××大学××大学院生であることを証明する』と書かれた横に、  
何かに脅えるような表情の酒井善一の顔写真が印刷されている。

武器アーカンプ？10 折りたたみナイフ

強さ 普通

分類 軽い刃物

詳細 刃渡り10？程度の刃物。

丈夫だが、リーチにやや難がある。

武器アーカイブ？37 蛍光灯

強さ 弱い

分類 軽い打撃武器

詳細 一般的な種類の蛍光灯。

陽動などに使え、用途は多い。

武器アーカイブ？40 自在箒

強さ 普通

分類 軽い打撃武器

詳細 学校での掃除の際、先生が使っ箒。

慣れないと使いにくく、先生でもたまたまに苦戦する。  
持ち手の先を削って尖らせれば殺傷力がある。

武器アーカンプ？42 38口径短銃

強さ 非常に強い

分類 銃器

詳細

標準的な拳銃。

装弾数は六発。

種類は、S & W

M 36。

酒井善一 一日目 20時47分06秒 外刃鉾山

終了条件 外刃鉾山内部への到達

夕焼けは水平線に沈んだ。酒井善一が逃げ込んだ外刃鉾山は、すでに懐中電灯が無くては少し先の視界も確保できないほどの状況になっている。

「……くそ、化け物め」

何年も使われていないであろう寂びれた物置小屋で腰を下ろし、途中で拾ったスコップを静かに床に置き、酒井はため息をついた。大学院生になった記念に購入したスーツだが、ここまで逃げる際に転ぶなどしてぼろぼろになっていた。

論文の提出を一か月後に控え、気分転換のためにドライブをしていた酒井だが、気づけばこの村に迷い込んでいた。道を尋ねようと民家に近づいた途端、狙撃されて大学の身分証もその際に紛失した。そして、襲い掛かる異形を片っ端から撲殺して今に至る。

「くそ、腹減ったな……」

こんな緊急時でも、空腹は普段と変わらない。逃げる際に食堂があったが、食物はどれも腐っていて、それを食した形跡があることに嘔吐寸前になった。

ある程度呼吸が整ったので、酒井は立ち上がった。物置ならば、何か役に立つ代物があるかも知れない。音に注意して探索すると、発煙筒を数本と、鉾山内の地図を見つけた。

「結構、広いな。それに深いな……」

茶色くなって読みにくい地図だったが、大まかな内部構造を理解するには十分だった。しばらく眺めているうちに、酒井はある点に気が付いた。

擦れてしまっているが、食糧庫と書かれていたのだ。

「事故って閉じ込められた時の非常用か？ 何かあるといいけどな

……」  
目的地は決まった。地図を折りたたみ、スコップを手にして、床に転がっていたヘルメットをかぶり、ゆっくりと外に出た。火種が無いので発煙筒は捨て置くことにした。

鉱山内部は光が射していないにも関わらず、不思議に明るい。頭上を見上げてライトがあるわけでもない。どういふことだ、と首を傾げた酒井だがこの場は無視して進むことにした。この程度のことかどうでもよくなるほど、今は異常な状況だから。

備え付けの梯子を下りてさらに深部に進む。鉱山労働者のなれの果てと思しき異形の男を背後から撲殺して、その身体をトロツコに乗せ、線路上に滑らせた。しばらくして闇の向こうから重低音が響いた。

「化け物め、まぬけな顔してそこに集まってる」

まだ揺動が完了ししことを確認したわけではないが、詰めの甘い酒井は悦に入る。悠々とシャベルを肩で担ぎ、大股で先に進む。

分かれ道になったところで、先ほどの地図を取り出す。物置よりも明るい坑内では、読めなかった箇所を読むことができた。

「採掘禁止か、ここだけ地盤が緩いのか？」

新たな発見だったが、大したことではなかったので軽く流し、正しい道を進む。正確には『採掘禁止』ではなく、『侵入禁止』だったが、些細なことだと彼は無視した。

堂々と小石を蹴飛ばし、強さを誇示するかのようにはスコップを振り回し、我が物顔で酒井は歩く。そばらしくして、目的地としていた食糧庫に辿りついた。

「何度よ、意外に近いな」

室内に敵がいることを想定して、スコップを構えながら特殊部隊の真似事をしながら扉を開ける。生暖かい空気に遅れて、カビのよ

うな不愉快な臭いが鼻をついた。思わず咳き込み、落ち着くまで数分を要した。

呼吸を整え、鼻を服の袖で抑えながら室内を物色する。

「どれもこれも腐ってやがる。どんだけ古いんだよ！」

怒りにまかせて非常食を棚に投げつける。それが呼び水となって綺麗に収納されていた食糧が雪崩のように落下する。

その中の一つを取り上げ、何気なく賞味期限を見た酒井は目を疑った。

「昭和四十二年だと？ どうりで腐ってるわけだな……」

あきらめて酒井は踵を返した。大きな物音をたてたことで危機に陥った人がいることなど知る由もなかった。

酒井善一 一 二〇時47分06秒 外刃鉋山（後書き）

アーカイブ？43 外刃鉋山の見取り図

解説

外刃鉋山の内部を記した手書きの地図。長い年月放置されたことで文字が擦れている。『侵入禁止』と赤字で書かれた場所がある。

武器アーカイブ？15 スコップ

強さ 強い

分類 重い打撃武器

詳細 外刃鉋山で使用されていた採掘道具。長年の雨風にさらされて先端が腐食気味だが、十分に武器としては使用可能。

武器アーカイブ？19 ヘルメット

強さ 普通

分類 軽い打撃武器（もしくは軽い防具）

詳細 外刃鉋山で使用されていたヘルメット。通常はかぶるものだが、武器としての使用も可能。かなり使い込まれていて、強度に若干の不安あり。

小西理子 一日目 20時58分47秒 外刃鉾山

鉾山内の片隅に隠れるように碑石が建てられていた。それを観察することに集中していた小西理子は、背後から迫る重低音の存在に気付くことができなかった。

重低音の正体はトロツコだった。路線の上を猛牛のように走り、最後には壁に激突して動きを止めた。直前で回避に成功した小西だったが、その傍にあった石碑は直撃を受けて大破してしまった。

「あーあ、せつかく面白そうな石碑だったのに」

欠片をつなぎ合わせようと試みたが当然できるはずもなく、すぐに諦めることになった。忌々しいトロツコに視線を向けると、異形の男が下敷きになっていた。

「危ないなあ。化け物の世界ではトロツコに乗って爆走する遊びが流行ってるのかなあ？ 死んでも生き返るから平気でーすってか」

この村に迷い込んでから何度も異形の相手と遭遇して、そのたびに倒していた。だが、倒しても生き返ることが分かると小西は完全に逃げ腰となった。無駄な体力を使うくらいなら隠れたほうが建設的だと判断したからだ。それでも、火かき棒は護身用として手放さない。

「レポートの提出どうしよっかなあ。化け物に襲われて間に合いませんでした とか言ったら教授に怒られるよなあ」

小西がこの村に迷い込んだきっかけは、近くの水力発電所でレポートのための聞き取り調査を行うためだった。彼女は経済学部で学生で現在三回生。電力供給量と現代経済流通の関連性についてが単位修得の条件だったのだ。

留年決定かなあ、と呟きながら坑内探索を再開する。

外はすでに闇だが、どうしてか坑内は明るい。まるでどこかに巨大な光源でもあるかのようだ。

「禿頭とかね……」

つまらないことを言いながら慎重に進む。このような状況下において、普段は友達からのん気だとからわれる小西の性格は大いに役に立っていた。常人ならば怯え、逆にから元気になることがあるが、彼女は自然体そのものだった。

トロッコの路線をたどり、分かれ道では右を選び、しばらくして管理室にたどり着いた。食糧庫でないことに落胆した小西だが、すぐに気持ちを切り替えて扉を開けた。

「お邪魔しますよお」

これまで慎重だった人間とは思えないような間抜けな声を出す。室内は真つ暗だったが、しばらくして目が慣れると備品が豊富だということに気付いた。鉱山では必須であろうシャベル、頭部を守るヘルメット、束になった軍手、さらには懐中電灯まである。

「おお、豊富だなあ。管理室だけとはあるねえ」

まるで昼強盗のように室内を物色して、発煙筒とマッチを拝借した。懐中電灯は電池切れだった。

一通り必要なものを入手したところで、一か所に留まりすぎるのは危険だという言葉思い出した。異形の相手に襲われた際に手を貸してくれた男からの助言だった。貰った名刺の肩書は社長だった。「それではこれで失礼しますよ。伊勢崎さんの教え通りに動くとしますか」

手持ちが潤ったことで小西の声音は以前よりも高く聞こえた。独り言を言いながら管理室を後にしてて、発煙筒を投げる真似をしながら大胆に坑内を進んだ。

いつまでも汚い坑内に留まるのは肌に悪いだろうと思いつつ、絶好調だった探索はあっさり終了した。来た時と同様の道をたどり、鉱山外部に立つ小屋に足を踏み入れた。前回が入ることができなかったので念入りに調べた。

「ほほう、ここにも発煙筒がありますな。誰かいたみたいだけど、持っていかないなんて馬鹿だなあ。トロッコに乗って遊んで死んだ化け物と同レベルだよ」

と言いつつさらに調べると、土をつめる麻袋が棚の裏に隠れていた。少々汚いが強度は十分で、小西はこれに発煙筒とマッチ、火かき棒、それから床に転がっていたロープを入れた。

いつでも開けるように紐は縛らず、代わりに先を輪っかにすることで持ち手を作った。旅人のように肩に担いだ小西は満足そうに顎を撫でた。

「これで茶色のマントがあれば西部劇だよ。帽子も欲しいなあ」

できればカーボーイハットがいい　そう思った瞬間に記憶が巻き戻された。五時間ほど前に訪れた廃屋で、似たような帽子を見かけたのだ。

「……ここから近いよな」

廃屋の場所はしつかりと覚えている。もちろん道順も。

しばらく悩み、最後に下した判断は「取りに行く」であった。

小西理子 一 目 20時58分47秒 外刃鉾山（後書き）

アーカイブ？8 マクロ経済学レポートの下書き

解説

小西理子のマクロ経済学レポート下書き。下書きのためか字は殴り書きである。右端に『白石忠孝』とある。

武器アーカイブ？1 火かき棒

強さ 普通

分類 軽い打撃武器

詳細 リーチに難あり

武器アーカイブ？44 発煙筒

強さ 特殊

分類 特殊

詳細 着火後しばらく煙を発生させる。

旧式のため時間は短い。

伊勢崎直哉 一日目 22時34分39秒 鎖条峠

終了条件 狙撃手の撃破

宵次集落を一通り探索した伊勢崎直哉は、そのまま道なりに歩き、鎖条峠に辿りついた。そこには異形の姿はなく、鳥や虫の鳴き声すら聞こえない。むしろ不気味な雰囲気だが、このような状況に慣れている伊勢崎にはまったく恐怖心など生まれなかった。

峠というだけあって、頂上につながる道が整備されていた。やや急斜面であるが、そんなことは気にせず上る伊勢崎。その健脚によって峠はあっという間に制覇された。所要時間は五分未満だろう。

頂には大小の石が無造作に転がっていて、生い茂る木々によって夜空を拝むことも叶わなかった。それでも、そこに祀られている祠だけは手入れが行き届いていた。

「失礼します、ご神体」

伊勢崎は深々と頭を下げて、さらに両手を合わせた。幼い頃から両親から躰けられてきたことで、主教的な建物を見るとつい拝んでしまうのだ。それが神に対して果たすべき最低限の礼儀だと口酸っぱく教えられた。

格子の隙間から覗くと、ご神体は石だった。成人男性の握りこぶし程度の大きさで、形は楕円形。黒ずんでいるが光沢はなく、黒曜石とも違うのだろう。

地学は専門外である伊勢崎は早々に興味を失い、すぐにその場を離れた。周囲に生い茂る木々の隙間から、高さを活かして探りを入れる。視界は悪いが、夜目の利く伊勢崎にはさほど苦にならず、吊り橋を見つけることができた。

その吊り橋は暗闇でも分かるほど老朽化している。一応はワイヤーを張ることで補強されているが、肝心の足場が木造であるために心もとない印象だ。

少々危険だろうがあれを渡ろう、と伊勢崎は踵を返して峠を下ろうとした。その時、背後から銃声がした。

「発砲音かつ！」

急いで身を屈めることで自身の安全を確保し、狙撃手の居場所を探る。その姿は、先ほどまで眺めていた吊り橋にあった。猟銃を構えた異形の男だ。

ならば標的は誰だと、さらに周囲を探る。ドラム缶が視界に入った。その背後の男が隠れていた。吊り橋を渡ろうとして狙われたのだろうか、手にはスコップらしきものを握っている。

ここで無視するのは目覚めが悪い。伊勢崎はメリケンサックを右手に装備して、可能な限り消音を心掛け、狙撃手の背後に回る。まだドラム缶の裏に隠れる男を狙っているようだが、こちらが下手に騒げば標的を換えられる恐れがある。腕利きである伊勢崎だが、さすがに猟銃を持った相手にメリケンサックだけでは苦戦は免れない。慎重に行動することにして、この場合はしばらく様子を見る。先ほどまでは闇雲に発砲を繰り返していた異形の男も、学習したのかドラム缶の裏から男が姿を現すまでは構えたまま動こうとしない。

「人間ほどではないが、十分に高い知能だ。黒魔術による死者の再生ではないようだ……」

これまで出会った異形の正体を掴み損ねていた伊勢崎だったが、これで完全に分からなくなった。緊急時において敵の素性を掴めないということとは、それだけで幾分か不利になる。情報戦とまではいかないが、この村のことをより知っているのは間違いなく異形の相手だ。

しかし、このままでは埒が明かない。襲われている男を助ける以上、このまま狙撃手を放置しておけば伊勢崎自身も吊り橋を渡ることができないからだ。立ち向かうには、銃器とまでは言わないが、せめてリーチの長い武器がほしい。

「純子から木刀、借りればよかったな」

久しく会っていない高校時代の同級生を思い出し、諦めずに周囲

を探る。すると、山積みになされた角材が視界に入った。急いで近づき、その一つを手にした。若干湿っていて、所々がささくれているものの硬度は十分だった。

「剣道は苦手だけどな。まあ、挑戦してみるか」

しゃがんだ状態で異形の男に近づき、吊り橋に足を踏み入れる。

板の隙間から見える谷底は吸い込まれそうになるほど暗く、落ちれば助からないだろう。

「いや、これを利用すれば」

このまま角材で殴りかかろうと考えていた伊勢崎だったが、さらに合理的な方法を思いつき引き返した。そして、吊り橋の側面を握って縦に横にと全力で揺さぶった。人間の力ではワイヤーによって補強された吊り橋を破壊することはできないが、中腹にいた異形の男としては致命的だった。身体の均衡を保つことができず、当然ながら猟銃による反撃もできないまま、真つ逆さまに谷底に吸い込まれるまで時間はかからなかった。

揺れが治まるまでその場で待機して、急いで対岸に渡る。ドラム缶の裏を除いたが、男はすでに姿を消していた。代わりに、手書きの地図が落ちていた。

「外刃鉾山か……」

それは鉾山の見取り図だった。手書きだがそれなりに内容はしっかりとしている。読みにくい部分もあるが十分だ。

「なるほど、禁則地か」

聡い伊勢崎は『禁則地』の文字に着目した。そこに何があるのだろうか、と。

深呼吸してから振り返る。谷底に消えた異形の男は、猟銃も道連れにしてしまったようだ。惜しいことをしたな、と伊勢崎は頭を撫でながら外刃鉾山へと向かった。

伊勢崎直哉 一目 22時34分39秒 鎖条峠（後書き）

アーカイブ？4 鎖条峠のご神体

解説

神道と村特有の主教が混合した結果、祀られたご神体。  
成人男性の握りこぶし程度の大きさで、黒色。

武器アーカイブ？35 角材

強さ 強い

分類 重い打撃武器

詳細 長さ70？

小栗大典 一日目 23時19分02秒 不死川教会

鬼守おにかみ小学校から脱出した小栗は、村の中央を流れる不死川ふしがわに近い丘の上にあつた建築物に逃げ込んだ。外観が独特な形状だったので分からなかったが、内装を見る限りそこは教会のようだった。

祭壇があり、その正面には数人掛けの椅子が均等に並べられている。小栗は最前列の椅子に腰かけて、小学校を脱出する際に入手した身分証を取り出した。

やはり、そこには酒井善一の名前と顔写真が印刷されている。

「あいつ、院生なのか……」

小栗が過剰暴行によって人を死なせてから、今年で五年目になる。留年せずに大学に通っていれば、確かに今年から院生ということになる。幼い頃からの友人であつた小栗と酒井。前者は刑務所帰りで、後者は有名大学の院生。あの事件以来、二人の社会的立場にはまさに天と地ほどに隔たりが生まれてしまった。

もしも、あの時に酒井が自分と味方になってくれていたら とは考えない。不思議なことに、あれだけの裏切りをしたかつての友人に対して小栗が懐いた感情は、憎しみではなく懐かしさだった。

思わず吹き出しそうになる。五年ぶりの再会が、まさかこんな地獄のような村でだと夢にも思わなかつたからだ。

「って、まだ直接会つたわけじゃないか」

早計な自分を笑い、身分証をポケットに入れようとした。その時、小栗は肝心なことに気がついてしまった。

この身分証を持っていたのは、あの化物。ただ単に遺失物として拾われたのなら問題はないが、力づくで 酒井を殺して手に入れたものだったら、それは穏やかなことではない。

その可能性に気がついた小栗は、こうしてはいられない、と急いで立ち上がった。この地獄のような村では、あの化物によっていつ命を奪われてもおかしくない。一刻も早く酒井と再会して、その安

否を確かめなければならぬ、と自らを奮い立たせた。

だが。

「どこ探せばいいんだよ……」

所詮小栗は、この村では余所者に過ぎない。半日彷徨っているが、村のすべてを踏破したわけでもなく、地図すら手元には無い。闇雲に探したところで出会える可能性は低く、それよりも化物と遭遇する危険性が遥かに高い。それにすでに深夜となっている。視界が悪い状況で行動することがハイリスクであることは、小栗にも容易に想像できた。

一瞬で燃え上がっただけに、冷めた際の反動は大きかった。半日の疲れが一気に全身に広がったかのように萎えてしまった。

この感覚は以前にも経験があった。忘れもしない五年前。憑りつかれたようにはみ出し者の同級生を素手で撲殺した際、教師に背後から羽交い絞めにされるまで小栗は燃え上がっていた。警官が駆けつけて、しばらくしてから冷めた。その時の感覚だった。

結局自分は根本的には何も変わっていない。小栗はそう痛感した。「じゃあ、どうすりゃいいんだよ……」

弱音を吐く小栗。その背後に人影が現れるが、落胆する彼は気づかない。

「動かないでください」

哀愁漂うような声が小栗の耳に届いた。それと同時に、首筋に刃物突きつけられた。日本刀だった。窓からの月の光をまるで鏡のように反射している。

自らの命が、背後の人物に握られていることを理解した小栗は黙って指示に従った。両手を少し上げて、自分が丸腰だということを示した。

「この村の人ではありませんね。とりあえず、名前を」

「……小栗」

「そうですか。では、小栗さん。ここに至るまでに、人間ではない存在と接触しましたか？」

正直に答えた。一度傷を負わされたことも。

「なるほど、つまりその傷はもう治癒したのですね」

「ああ……」

日本刀が小栗の首筋を離れた。振り返ってください、と指示された。従うと、そこには無表情の男がいた。神父のような服装で、右手には日本刀、左手にはその鞘を握っている。

神父服の男は深々と頭を下げた。

「突然の無礼をお許しください。こちらも命が懸っているので」

「はあ……」

生返事のために、神父服の男は自ら名乗った。

「私は、刈谷かじやと申します。この教会で、神父をしています」

「あつ、だから尋問したんですか？」

「どういうことですか、それは」

「いや、不法侵入だったから……」

申し訳なさそうに小栗が後頭部をかくと、ああ、と刈谷は納得した。

「そういうわけではありません。こちらの都合です。どうぞ気になさらず」

少し話しませんか、と刈谷は提案した。日本刀を突きつけられたばかりなので抵抗があったが、それでも小栗は応じた。この村の間で、まともである刈谷と話せば、有益な情報を多く得られると考えたからだ。

分かりました、と小栗が答えると、刈谷は小さく頷いた。

「どうぞ奥へ」

抑揚の無い声で、刈谷は祭壇横の扉を指さした。

小栗大典 一日目 23時48分17秒 不死川教会

刈谷が案内した部屋は、祭壇の裏側に位置していて、どうやら彼の寝室のようだった。六畳程度の広さで、洋風の佇まいだった。

椅子に座った状態で落ち着きなく室内を見渡す小栗に、熱い珈琲が差し出された。

「さあ、遠慮なく」

そう勧められたが、ここにたどり着くまでに目にしてきた赤い水のことを思い出してしまい、どうにも拒否反応を示してしまう小栗。その表情を見て、あれをご覧になったのですね、と刈谷は解釈した。「あの赤い水を過剰に摂取すると、連中の仲間になってしまいますが、これは問題ありません。非常用に備蓄しておいた水ですから」「す、すみません」

非礼を詫びて珈琲が注がれた容器を受け取る。半日飲まず食わずの小栗には、その一杯がこれまでのどの珈琲よりも有難く感じられた。

小栗が落ち着いたところで、刈谷が切り出す。

「小栗さんの身体にも赤い水が入ったそうですが、それはどこの傷ですか？」

「肩です、後ろから鉈で切り付けられて……」

上着を脱いで肩を露出する。すでに塞がっているが、そこには確かに鉈によって抉られた深い傷があった。

傷口を凝視して、刈谷は一言。

「この程度ならば、さほど心配はいりません」

「どのくらいなら、その あいつらの仲間になってましたか？」尋ねたくないことだったが、現実から逃避するわけにもいかず、心して返事を待つ。刈谷はしばらく考え込み、一瞬だけ視線を床に向けた。

「仮に腕を切り落とされていれば、確実に仲間入りでした。その意

味では、この程度で済んで幸運だったと言えます。背後から不意を突かれたそうですが、よく回避できましたね」

素晴らしい、とは口にしないが、感心したように小さく頷く刈谷。そんなことはない、と小栗は慌てて否定する。

「いいや、本当に運が良かっただけです。見えたんですよ」

「見えた？」

「その、後ろから化物が迫ってくる光景　むしろ、化物の視界が脳裏に浮かんだって感じですかね。って、そんなわけないですよ。幻覚に決まってるよ、と小栗は自らの体験を真っ向から否定する。しかし、刈谷は考え込む素振りを見せる。

「いえ、それは必ずしも幻覚だとは限りません。幻視　という言葉葉に心当たりは」

「幻視？　いや、聞いたことありませんけど」

妙なことを口にする刈谷に、小栗は首を傾げる。だが、最初こそは自分をからかっているのだろうと考えていたが真剣な刈谷の表情を見て、それが冗談ではないと悟った。

「その幻視ってというのが、俺が見た不思議な光景のことですか？」

「その可能性が非常に高いです。幻視とは、一定範囲の生物の視界を盗み見る能力のことで、この村では生まれつき会得している者が時折現れます。ですが、小栗さん、あなたは村の人間ではない腑に落ちませんね」

そう言っつて刈谷は立ち上った。そのまましばらく室内を無言で歩き回り、思い立ったようにカーテンの隙間から外を覗き見た。

その時だった。再びあの音が鳴った。

「ま、またかよ　」

反射的に立ち上がりそうになった小栗だが、突然の頭痛にまるで脚から先の神経が破壊されたかのようにその場に倒れ込んだ。床に伏した後も原因不明の頭痛は治まらず、結局サイレンが鳴り終わるまで続いた。

「大丈夫ですか」

すかさず刈谷が手を差し伸べる。まだ脳内の残響があるものの、小栗は根性で立ち上がった。ふらつく彼に刈谷が肩を貸し、寝台に寝かせる。

「この分だと、今日はもう休むべきです。幸い、ここは比較的安全な場所です。日が昇った後に、二人で出発しましょう。その方が安全です」

この刈谷の提案に、小栗は黙って頷いた。

終了条件 廃屋からの脱出

目的地の廃屋に辿りついた小西はすぐに内部を探索して、二階の物置でお目当てのカーボーイハットを手に入れた。ご満悦の彼女だったが、その表情は階下から聞こえた物音によって凍りついた。

「はい、ちよーつと失礼しますよ」

階段から下を覗くと、ちょうど玄関から化物が侵入してくるころだった。玄関は外から板が打たれていて、小西は裏口から忍び込んだのだ。

化物の手には、板を壊す際に使用したと思われる斧が握られている。小ぶりだがその分小回りが利きそうで、狭い廃屋内では厄介な武器だと小西は思った。

まだ化物が二階には来ないだろう、と考えた小西はしばらく物置で作戦を練ることにした。最初に現在の所持品を確認する。外刃鉾山から持ち出した麻袋の中には、発煙筒が数本と燐寸、そして唯一の武器である火かき棒がある。

鉾山から廃屋まで一度も化物から捕捉されることなく辿り着くことができたので所持品は手つかずだが、小西には一つだけ不満があった。

「この帽子、よく見たらめっちゃ汚いし……」

命が懸っている常況でも、小西理子という人間の思考回路はどこかずれている。かび臭いカーボーイハットを麻袋に片付けて、代わりに火かき棒を握りしめる。

ノープランだが、腹を括って物置から出る。二階には物置の他に子供部屋、そして寝室らしき部屋がある。どちらもまだ入っていないだったので、廃屋から脱出する前に踏み込むことにした。

まず子供部屋に入ると、早速室内を物色する。子供服、ランドセ

ル、教科書、ノート、リコーダー、ぬいぐるみ、と典型的な物ばかりが目についた。

リコーダーを手にして、小西はそれを掲げる。

「懐いねえ。猫ふんじゃったとか、吹いたなあ」

すでに十年以上前のことだが、無性に懐かしくなりそれを麻袋に放り入れた。他にも興味を持った連絡帳をねじ込む。

寝室からはバスタオルを一枚拝借した。邪魔になることも考えずに無理矢理麻袋に入れた。

大漁大漁、と小西は満面の笑みで言う。

「さあて、とつとと脱出しちゃいますかあ」

威勢よく火かき棒を握った腕を振り回す。その反動で、手から火かき棒がすべり落ちた。正確には、放り投げてしまった形になった。ガラスを突き破った火かき棒はそのまま廃屋の外に消えた。小西は呆然としてその場に立ち尽くした。私の人生詰んだかも、と彼女はこの瞬間ほど絶望したことはない。

階下から化物の奇声が響く。板張りの廊下を乱暴に走っているのだろうか、耳障りな重低音が徐々に近づいてくる。

小西は鈍い動きで階段から下を覗き込む。

「おお、ファンタスティック……」

目と鼻の先に化物がいた。斧を構えて、眼球から赤い水を垂れ流した目をさらに見開くと、先ほど以上の奇声を上げて小西に向って突撃を開始した。

「ちよ、ちよつと冗談じゃないつてえ！」

さすがの小西も危機を悟って悲鳴を上げる。麻袋を振り回して威嚇を試みるが、そんなことで怯む相手ではなかった。何が楽しいのか、不自由な日本語を呟きながら斧を振り回し、階段の手摺と壁を破壊する。

絶体絶命かと思われた小西だが、ここで彼女に好機が訪れた。化物が無造作に振り回した斧が壁に深く刺さり抜けなくなったのだ。麻袋から発煙筒を取り出す。震える手で燐寸を擦り、何度か失敗し

ながら着火したのは斧が抜ける直前だった。

階段の中腹に発煙筒を放り投げ、化物の視界を完全に遮断した。その隙を逃すことなく、小西は階段を一気に駆け降りた。幸い階段の横幅は広かったため、小柄な小西が化物の横を素通りするには十分だった。

さらに思わぬ誤算があった。慌てて降りたことで知らぬうちに化物の身体の均衡を崩していたのだ。一階に到達してすぐに玄関から外に出た小西は気づかなかつたが、化物は階段から転落した。不運に延髄を損傷、動きを停止した。

廃屋から脱出してもしばらく小西は走り続けた。しかし途中で思い出したことがあって急停止した。

振り返って小西は叫ぶ。

「お邪魔しましたぁ、宗像さぁんっ！」

のん気、律儀、馬鹿。これらの性格を備えた小西にとってはいごく自然な行為だった。

小西理子 二日目 01時43分37秒 宗像家（後書き）

アーカイブ？33 カーボーイハット

解説

小西理子が宗像家から拝借した年代物。かび臭いが外観は良く、生地も上等。

武器アーカイブ？38 リコーダー

強さ 弱い

分類 軽い打撃武器

詳細 小学校などで用いられる楽器。プラスチック製で非常に軽い。

三つに分解が可能。演奏も可。

小栗大典 二日目 05時10分57秒 不死川教会

終了条件 怪力屍人の撃破

不死川教会で夜明けを待っていた小栗だが、身体こそは疲労しているにも関わらず一睡もすることができなかった。肉体的な疲労よりも精神的な緊張が勝り、それが彼の意識を維持させた。

刈谷は腕時計を確認して、そろそろ出発しましょう、と言った。まだ外は薄暗く、行動するには危険が伴うとして小栗は反対した。それに対して刈谷は、一か所に留まっているほうが危険ですよ、と諭すように言った。結局小栗が折れて、すぐに出発することとなった。

出発に先立ち、刈谷は口頭で村の地理にて簡単に説明した。

「私たちが今いる場所は、不死川教会と呼ばれていて、ほぼ村の中心部にあります」

それを起点として、三つの集落が設けられている、と刈谷はまず北を指さした。北の集落は宵次集落といい、近くには村唯一の鬼守おにかみ小学校がある。北と南を結ぶ峠は、鎖条峠さじょうと呼ばれていて南には廃鉱山である外刃鉱山がある。

東と西の集落はそれぞれ暮棚くれだなと呼ばれ、西東で区別されている、と最後に刈谷は言った。

「細かいことまで説明する時間はありませんから、余裕があれば随時お話します。これから私たちは西暮棚集落へ向かい、その区長さん宅で電話を探します」

この村は電波受信状況が大変悪いので、そこまで移動しなくては外部と連絡が取れない、と刈谷は道中で説明した。その手には先ほど小栗に突きつけた日本刀が握られており、さらに懐中電灯まで所持している。

小栗は伊勢崎直哉から渡された折り畳みナイフを取り出しただけ

で、小学校で入手した拳銃の存在は刈谷に伝えなかった。この村で生き残るためには、まだ確実に味方だと確定していない相手に手の内を明かすことは危険だと判断したからだ。

不死川教会と西暮棚集落を結ぶ道は棚田になっている場所があり、そこでは異形の存在が緩慢な動きで農作業に没頭している姿を何度か見かけた。すでに化物と成り果てても人間としての記憶がおぼろげに残っているようですね、と刈谷は何の感慨も無さそうに呟いた。「ところで小栗さん」

西暮棚集落まであと半分というところで突然刈谷が足を止めた。その口ぶりから察するに何か自分に聞きたいことがあるのだろう、と小栗もまた歩を休めた。

「教会に辿り着くまで、誰かと　いえ、村の人間と顔を合わせましたか」

今に至るまで、少なくとも刈谷以外の村の人間とは一度も顔を合わせていなかった。そう答えると、これまで無表情だった刈谷の眼球が一瞬だけ見開かれた。

「すると、私以外の村人は全員が異形の姿になってしまったということでしょうか」

「そう考えるのが普通ですね」

小栗は無意識的に希望的観測を避けていた。すでに半日以上も村内を彷徨、異形の存在と対峙していた彼は自分でも気づかないほど精神的に消耗していた。消耗で済んだだけ幸運だった。投獄を経験していたことが皮肉にもこの異常事態に耐えうるだけの余裕を産み出していたのだ。

刈谷はそれからしばらく考え込む仕草をして、路肩の大石に腰かけた。

「小栗さん、あなたは彼ら　異形の存在についてどのような考えですか」

「不気味で汚らわしい存在だと思っています。正直、近寄りたくもない。ですが、できることなら一度死んだ相手を二度殺すことはし

「たくありませんから」

それは嘘偽りのない言葉だった。小栗の心中は相手を蔑む感情と、悼む気持ちとが混ざり合い非常に複雑な状況だった。これまでに何度となく敵対した異形の存在だが、中にはまだ生前の面影を留めていた者もいた。彼らは自分たちを発見しなければ危害を加えることもせず、同じことを繰り返しているにすぎない。そう考えると虚しさがかみ上げてきた。

揺れる感情を抑えるために小栗は視線を逸らした。

「刈谷さん、あ、あれ」

自分の目が信じられず、小栗は刈谷にも見るよう促した。

「どうかしました」

刈谷もまた絶句した。二人は隠れることもできずにその場に立ち尽くしてしまった。

二人の視線の先には、これまで対峙した異形の存在が霞んで見えるほどさらに常識を超えた化物がいた。

常人の二倍はある巨体。肥大化した両手。頭部は二つ。全体との均衡がとれない脚は短く、常人のそれと変わらないが逆に見る相手の不安を増大させる。

まだ二人の存在を感知していないことから視覚に乏しいのだろうか、それでもすでに退路は断たれているとあっていい。ここは道幅が狭く、周囲が柵田となっているので迂闊に踏み込めば足を取られてしまうからだ。

現時点で仮に二人がその存在を捕捉された場合、打ち勝つ以外には生き延びる方法は無い。

「敵はまだ私たちに気づいていないようですが、それも時間の問題でしょう」

目にした瞬間こそ絶句した刈谷だが、やはり彼はすぐに冷静な口調で自分たちの現状を確認した。その上で、力を合わせて戦わなければいけない、と彼は断言した。

それについては言われずとも小栗は承知していた。しかし、これ

までとは格の違う相手にどのように挑むべきか考えも及ばなかった。「あの腕、太いだけでなく長い。頭を狙おうにも、こちらには日本刀と折り畳みナイフがそれぞれ一振り。さて、どうしたものですかね」

そう言いながら、刈谷は屈みこむ。先ほどまで腰かけていた大石に身を隠す形になって、さらに小栗を手招きした。

お互いに一つの大石の影を共有した状況で彼らは作戦を練る。

「あの化物、さっきから同じ道ばかり回っていますね」

「恐らく、当分はあのままでしょう。そうなれば厄介です。ここを動けなくなる」

やはり戦うしか道は無い。二人はその短い会話だけで腹を決めた。そして小栗は背に腹変えられない状況で切り札を伏せておくのは何の意味もないことだと思ひ、懐から拳銃を取り出した。それを見せられた刈谷は顎を撫でて、撃鉄に指を掛けないよう注意しながら手に取った。

「これなら遠方からでも攻撃できますね。私が囷になりましょう。」

小栗さん、化物の隙を伺って、できれば頭を狙って撃ってください」

自ら危険な役目を志願する刈谷。引き留めようとした小栗だが、一度決断した彼の行動は早かった。刀を鞘から抜き、すぐに立ち上がったかと思えばそのまま低い姿勢で駆け出した。

鞘を気に叩きつけることで化物の注意を引いた。それまでただ徘徊していただけの化物が、まるで獲物を見つけた狼の如き機敏さで刈谷の姿を捉えた。

化物は図体こそ脅威だったが、やはり機動性には欠けていた。それでも腕の長さによって刈谷は十分攻撃が届く距離まで詰められた。先手を取ったのは刈谷だった、化物が左腕を振り上げた瞬間を見計らい、素早くすり抜けた。背後から日本刀で斬り付ける。しかしここで思わぬ誤算があった。

背中突き刺さった刃が、抜けなくなっていたのだ。まるで傷口が即座に再生するかのように、生き物の如く刃を捉えられた状況に刈谷

は一旦その場を離れた。

丸腰となった刈谷だが至って冷静に化物と距離を置いた。その際に小栗に視線を送った。残弾は五発。すべて拳銃に込めて、構える。機動性に欠ける化物を狙うのは、存外難しいことではなかった。

双頭であるが故にどちらを狙うべきか迷っただけで自分でも驚くほど冷静に小栗は引き金を引くことができた。

すべてを撃ち尽くしてもまだ化物には息があつた。虫の息になった化物に最後の一撃を食らわせたのは刈谷だった。背中から日本刀を抜き取り、豪快にも頭部へそれを投げたのだ。

断末魔を上げて倒れた化物。刈谷は小栗を呼び、拳銃の残弾について尋ねた。

「全部撃ち尽くしましたよ。これでこいつは邪魔でしかない」  
そのまま拳銃を棚田に投げ込もうとする小栗。それを刈谷は制止した。

「宵次集落に駐在所があります。その拳銃が仮に駐在さんの物であれば、そこに弾薬があるかもしれません」

捨てるのは早計です、と諭す刈谷。小栗はすぐに納得して再び懐に拳銃をしまった。そのまま二人はその場を去ろうとした。化物を背に歩き出した。

そしてまた想定外のこと起きた。  
死亡したかと思われた化物が息を吹き返したのだ。完全に油断していた二人は、まず刈谷から吹き飛ばされた。その身体は泥まみれの棚田に飲み込まれた。

辛うじて踵を返すことに成功した小栗はすぐに折り畳みナイフで応戦しようとした。だが、日本刀と拳銃を用いて辛勝できた相手に抵抗できるはずもなく彼もまた吹き飛ばされた。運悪く、近くの樹木に直撃。その衝撃で吐血した。

意識を失う寸前、それでも小栗はなお抗おうとした。無慈悲にも小栗に追撃を仕掛けようとする異形の存在。

最後に小栗は見た。自分と化物の間に立ちふさがる男の姿を。

小栗大典 二日目 05時10分57秒 不死川教会（後書き）

アーカイブ？7 暮不入村の地図

解説

暮不入村の地図。

不死川教会を中心に、北に宵次集落、西に西暮棚集落、東に東暮棚集落、南に外刃鉾山の地名が大きく書かれている。鬼守小学校、嵯峨病院などの施設は宵次集落に設置されている。

伊勢崎直哉 二日目 05時41分29秒 棚田

終了条件 怪力屍人の撃破、小栗大典の救出

鎖峠しんぎょうから戻り、西暮棚集落に向おうとしていた伊勢崎は、その途中の棚田で思わぬ出来事に遭遇した。半日ほど前に助けた男と、神父服の男がこれまでとは違う姿をした異形の存在を相手に奮戦していたのだ。

その光景を木の陰に隠れて眺めていた伊勢崎はいくつか驚いたことがあった。まず、神父服の男の刀捌きが相当様になっていたことだ。彼の同級生に剣道で全国有数の実力者だった女がいるのだが、それにも劣らぬ技量だと伊勢崎の目には映った。

そして、この非常事態においても半日ほど前に助けた男が落ち着いていたことだ。先ほど助けた際には混乱していて、意味の分からぬことも口走り、伊勢崎に対しても声を荒げていたあの男がだ。

この村に迷い込み、わずか半日で人がここまで豹変するものか、と伊勢崎の興味は完全に拳銃を構える男に向けられていた。

弾丸をすべて撃ちつくし、神父服の男の一撃で巨大な異形の存在は地に伏した。

図体こそは脅威だが、動きは緩慢、特に知能が高いわけでもない。それが伊勢崎の下した評価だった。銃器さえあれば一人でも十分に相手取ることができると。

自分が合流する必要はない、と判断して伊勢崎はそのまま踵を返そうとした。しかし、ここで異形の存在がその脅威を見せた。

倒れたばかりの異形の存在が、早くも復活したのだ。あれだけの猛攻を受けながら、まるで何事もなかったかのように立ち上がったのだ。それに気が付かない男たちは、神父服の男から吹き飛ばされた。

伊勢崎は急いでその場から駈けた。神父服の男は柔らかい泥に落

ちただけなので心配ないだろうと考え、木に激突した男を助けるため化物の前に立ちふさがった。

愛用のメリケンサックを両手に装備する間も、伊勢崎直哉という男は実に冷静だった。このような状況だが、経験豊富な彼にはすでに慣れたことだったからだ。

肥大化した右腕を振り上げる化物。その隙を見逃さず、伊勢崎は脇腹に鉄拳を叩きこむ。いか巨大であろうと、その根本的構造は人間とそう変わりはない。拳が食い込むと同時に、何かの骨が折れた感触が伝わってきた。

化物は奇声を発しながら両腕を振り回し、伊勢崎を薙ぎ払おうとした。その範囲の広い攻撃を、伊勢崎は下手に避けるのではなく大縄を跳ぶ要領で振り回される腕を回避した。

技術的には伊勢崎が完全に勝っている。それでもリーチに関しては化物に分がある。一度距離を取るために、彼は体操選手のように華麗な連続バク転で後退した。

凝った首を動かし、薄目で化物を観察する。しばらくそうしていると、何故この巨大な化物だけが異常な速さで息を吹き返したのか見当が付いた。弾丸によって破壊された双頭の片割れは、いまだ完全には治癒していない。この化物は、頭が二つあるため片方が潰されても平気なのだろう、と伊勢崎は冷静に分析した。

ならば両方とも潰してしまえばすぐには再生できないだろう、と伊勢崎は多少面倒に思いついながらもここで始末をつけることに決めた。

軽く肩を回し、化物の背後に立つ木を根元から先まで凝視する。高さは約六メートル、助走をつければ十分によじ登れる高さだった。迫りくる化物の攻撃を軽くいなし、先ほどよりも遙かに早く駆けつけた。勢いを殺さずに木の枝を掴み、そのまま腕の力だけで頂上に至った。そこは化物の頭部を狙うには絶好の場所だった。

化物の接近を待ち、適当なところで躊躇もせず伊勢崎は飛びあがった。狙いは完璧で、化物の頭部に張り付くことに成功した。図体

が優れているだけあって、大人が一人飛び乗っても化物は多少揺れただけだった。立派なことだが、むしろここでは落とさなかったことが不幸だった。

それまで届かなかった頭部に伊勢崎は容赦なく拳を固めた。皮膚が裂けようと、血が噴き出そうと、筋肉が断裂しようとして、頭蓋が砕けようと、脳髓が流れだそうと、化物が断末魔を上げようと、決して攻撃の手を緩めなかった。

双頭を潰された化物は再び地に伏すこととなった。倒れそうになる瞬間、伊勢崎は即座に飛び降りた。空中で一回転した彼は見事両脚揃えて着地した。

完全にこと切れたことを確認して、伊勢崎は男たちの介抱に向かった。

「おい、しつかりしろ」

吐血していることを考えて、できるかぎり優しい力で身体を揺らす。それでも返事は無い。口元に耳を近づけると、乱れているものの呼吸する音が聞こえた。

片方の無事を確認すると、すぐさま棚田に足を踏み入れた。だが、肝心の神父服の男の姿はどこにはなかった。さらには日本刀もない。「逃げたな、あの恩知らず」

悪態をつきながらも、それでも無事なら、と伊勢崎は溜飲を下げた。ため息をついてもう一度首を捻る。

自分にとっては雑魚に毛が生えた程度の相手でも、一般人には脅威となりうる。目の前に倒れている男を軽々と肩に担ぎ、伊勢崎は今後のことを考えた。

この村の赤い水を迂闊に摂取すれば、それだけ異形が存在に近づいてしまう。だが、水分を無くして人は長時間の活動はできない。ならば今は持久戦に備えて武器以外の備品を確保するのが先決だろう、と伊勢崎は判断した。

まずは西暮棚集落だ、と伊勢崎は大の男を一人担いでいるとは思えない速度で走り始めた。

伊勢崎直哉 二日目 05時41分29秒 棚田（後書き）

アーカイブ？11 伊勢崎直哉の手帳

解説

伊勢崎直哉愛用の手帳。この村に侵入してからの出来事が記されている。

『化物に変異する際に、あの赤い水が大きく関係していることは確実だ。人間の姿を維持しているように見えるが、それは外見だけのことです。知能は大半が失われている。どこから赤い水が湧いたか、それを知ることができればこの村を救うことも容易になるだろう。化物の戦闘能力については問題にならない。痛覚がすでに失われているのだろうか。いずれにしろ、数人を相手取することも難しくない』

小西理子 二日目 07時44分11秒 宵次集落

終了条件 嵯峨病院への到達

宗像家を脱出した小西は、華奢な外見に似合わない健脚で宵次集落に辿り着いた。一息つくためにバスの停留所と思われる場所で腰を下した。

すでに日が昇る時刻ではあるが、空は一面の鈍色で村全体の閑散とした雰囲気は拍車を掛けている。それでも周囲に異形の存在は確認できないだけ幸運なのだろう。それをいいことに、小西は大胆不敵にもその場で横になった。

この村に迷い込んで、やがて一日が経過しようとしている。大学のレポートを仕上げるためにこの付近を散策していた小西は知らず知らずに村に足を踏み入れていた。脱出しようと試みても、またこの村に戻ってしまうのだ。

車輪で遊んでるハムスターみたいだなあ、と小西は少々の外れなことを思った。

のん気な性格の小西だけあってこの緊急事態でも楽観的に行動することができていたが、それもそろそろ限界に近づいている。丸一日、彼女は食事を採っていないからだ。

精神的に追い詰められれば肉体も疲労する。それが一般人の常識である。しかし小西の場合は空腹こそが最大の苦痛であった。一日六食が基本である彼女からすれば一日絶食しただけで死活問題である。

カーボーイハットの次に狙うもの、それは食糧だった。

腹の虫を鳴らしながら立ち上がる。欠伸を噛み殺しながら、しばらく道なりに進む。すると前方に張り紙が見えた。近くで読んでみると、それは病院から村人への予防摂取案内だった。

嵯峨病院 と張り紙には手書きされていた。ここなら何か食料

があるかもしれない、と小西は目的地を嵯峨病院に決めた。

詳しく張り紙を読むと、簡単に嵯峨病院までの道のりが記されていた。張り紙を剥がし、愛用の麻袋へ放り込んだ。

しばらく歩くと民家が密集した場所に辿り着いた。どこからか不気味なノイズが聞こえた。その音源を探ると、焼却炉の中から携帯電話が見つかった。

真っ白な携帯電話は、雑に扱われた結果だろうか所々が汚れている。音はアラーム音だったようだ。ちょうど午前八時に鳴るように設定されていた。時計を持たない小西はこれを拝借することとした。麻袋ではなくポケットに直接仕舞った。

さらに小西はその付近の民家を虱潰しに探索した。空腹ではあるものの好奇心が勝ってしまった。

三つ目の民家 曾根村家で、小西は思わぬ物を発見した。

「あつ、きょーじゅの本だっ！」

それは小西が所属しているゼミの教授の著書だった。白石忠孝と確かにある。何か感慨深いものを覚えた彼女は迷うことなくそれを麻袋に入れた。

満足した表情で先にすすむ小西。だがそうは問屋が卸さない。ここで異形の存在が彼女の前に立ちふさがった。

ちようど足元で弾丸が跳ねたのだ。驚きで腰を抜かした小西。そんな彼女を狙い、必要な銃撃が続く。四つん這いで物陰にまで逃げおおせたころには服は汚れていた。

辺りの様子を伺うが、どこにも化物の姿は無い。もしやと直感に従って家屋の屋根を探した。小西の読み通り、猟銃を構えた異形の存在が彼女を見下ろしていた。

物陰に隠れていれば容易に狙撃されることはない。だが持久戦ができるほどの余裕が今の小西にはないのも事実だ。小西の手元にある武器は、数時間前の宗像家で手に入れたりコーダーのみ。対する相手は猟銃。彼女の不利は明白だった。

ならばこちらはまともな人間であることを活かさなければならな

い。小西は上智大学経済学部の学生として、そして何より食料のために知恵を振り絞った。

麻袋から発煙筒を取り出す、そして移動を開始する。狙撃手の背後に回り込むためだ。

狙撃手は高所に陣取っていることで非常に視野が広い。それでも欠点はある。真下に回り込まれると死角になってしまうことだ。だから小西はそれを利用した。

できるかぎり近づき、これ以上接近すれば発見されるだろう位置まで小西は勇敢にも進んだ。ちょうど井戸のような場所に彼女はいた。狙撃手の背中が見える。監視のために一定の時間で方向を変えているようだ。

燐寸を取り出し、発煙筒に着火する。すでに水が枯れてしまった井戸に投げ込むと、しばらくして底から煙が立ち上った。さらに二本目、三本目を投入する。立ち上る煙は遠くからでも目視できる大きさになった。当然ながら狙撃手も反応を見せた。

井戸に近づくため、狙撃手は屋根を降りた。これこそが小西の作戦だった。狙撃手が井戸に辿り着くまでに、彼女は物陰に身を潜める。

井戸までやって来た狙撃手は間抜けにも覗き込んだ。その背中無防備な背中を、物陰から飛び出た小西が渾身の力を込めて押した。

本来なら力では狙撃手が勝ったであろうが、不意打ちに加えて、その姿勢が均衡に欠けたものだったことで小西に力負けしてしまった。

狙撃手は猟銃ごと井戸の底へ消えた。しばらくして煙が治まり、小西は恐る恐る井戸を除いた。息絶えた狙撃手の姿があった。

相手は化物だが、それでも死体を見るのは気分が良くない。小西は顔をしかめながらその場を離れようとした。その時、ポケットから先ほど拾った携帯電話が落ちた。彼女は気がつかなかった。

剥がした張り紙を頼りに、しばらく歩くと病院らしき建物に辿り着いた。周囲を見渡すと、嵯峨病院、という看板が立っていた。

小西理子 二日目 07時44分11秒 宵次集落（後書き）

アーカイブ？31 嵯峨病院の張り紙

解説

2008年9月28日に嵯峨病院で予防摂取を行います。

村民の皆さんは必ず来院してください。

都合の悪い方は当院までご連絡ください。

院長 嵯峨文子

アーカイブ？20 酒井善一の携帯電話

解説

酒井善一の携帯電話。

白色の最新機種。アドレスは家族と大学院関係者のみ。

着信音は、『G線上のアリア』。

アーカイブ？6 『経済学のすすめ』

解説

経済学のバイブルとして学会で人気を博すロングセラー。

『学問のすすめ』を参考とした独特の文体が魅力。

著者は、上智大学経済学部教授『白石忠孝』。

伊勢崎直哉 二日目 10時11分44秒 西暮柵集落

終了条件 区長の家への到達

廃屋の窓から外を覗く伊勢崎。異形の存在が一か所に集まっているのが見えた。

化物の数はおよそ九名。伊勢崎ならば問題なく一人で倒すことができる人数だ。それにも関わらず彼がこの廃屋で籠城しているのは訳があつた。

伊勢崎は今一人ではなかつたのだ。

「おい、小栗。そろそろ動けるか？」

壁に身体を預けた状態の小栗は軽く片手を上げること健在を示した。伊勢崎が彼を助けたのは、これで二回目になる。

「外、どうですか？」

「化物が密集しているな。別に問題にならない数だが、お前がその状態じゃ強行突破はできないな」

木に激突した衝撃で、小栗の内臓は一部損傷していた。動けないほどの傷ではないが、まともに化物と戦える状態ではない。

伊勢崎はため息をついてその場に腰を下した。どつしりと腰を据えたまま、小栗と向かい合う形となる。

「お前、手元に武器は無いんだな？」

申し訳なさそうに首肯する小栗。始めから良い返事を期待していたわけではなかつたので、そうか、と伊勢崎は事務的に相槌を打った。

今の二人には、手元に武器が無い。強いて言うならば、伊勢崎自前のメリケンサックだけだ。徒手空拳でも伊勢崎としては問題ないのだが、これから先小栗と行動を共にするとなれば少々厄介となる。根も葉もない言い方をすれば、今の彼は足手まといである。いかに伊勢崎個人の戦闘能力が優れているとしても、その身体は一つしかなく、誰かを守るためには必然的に自信を犠牲にしなければな

らなくなる。

基本的には自分が守ることになるとしても、せめて小栗自身にも自衛の手段を持ってもらいたい。それが伊勢崎の本音だ。

「あの時、拳銃を撃っていたらどう。もう弾丸は残っていないのか？」

「撃ち尽くしました。本当にあの時は必至だったから……」

せめて拳銃に残弾があれば、それだけで伊勢崎の負担は随分と軽減されただろう。とことん情けない自分に嫌気がさした小栗は両手で顔を覆った。

目を閉じたところで、刈谷との会話が突然脳内で再生された。

「そうだ、駐在所に行けば弾があるかもしれないって、あの神父が」

「それは本当か。駐在所はどこだ？」

「ええ、確か 宵次集落だったと思います」

ここからは遠いな、と伊勢崎は舌打ちした。それでも銃器が使えるようになることは非常に魅力的だ。あれならば必要以上の力がなくとも自衛の手段となる。怪我人である小栗にとっては最適な武器だ。

もう一つ、小栗は刈谷との会話で聞いた重要な単語を思い出す。

「それと、この集落の区長の家には電話があるとか……」

この言葉に伊勢崎の直感が過敏に反応した。彼自身の電話が通話不能状態となっているので、これまで電話に頼るといふ考えが思い浮かばなかった。村外と連絡を取るのは無理でも、村内ならば通話できるのではないかと彼は考えた。

「区長の家の場所は分かるか？」

「多分、集落で一番大きい家だと言っていました」

少々曖昧になっている記憶だが、それでもその情報に関しては自身があった。刈谷との会話では重要だと思ったこと以外は聞き流していたからだ。

伊勢崎はこの廃屋に籠城する前に、一度集落を一周していた。その中で見た家屋で一番大きなものは、恐らく集落の中央に建てられ

た三階建だ。その場所への道順を脳内で再生する。

「よし、いけるぞ。早速出発だ」

小栗は伊勢崎の手を借りて立ち上がった。かなり回復はしているものの、やはり走れる元気はない。そのことを察した伊勢崎は、ゆつくり歩くから心配するな、と優しい言葉をかけた。

廃屋から出る前に、再度外の様子を確認する。やはり少し離れた場所で化物の集団が屯している。その姿は近所どうしの人間が世間話をしているようにも見えた。この村でもかつて平和な日々があったのだらう、と伊勢崎は知らず知らずのうちに拳を握りしめていた。この村を地獄へと変えた存在　それを必ず抹殺すると伊勢崎は誓った。

「あの化物どもは俺が相手をする。お前は見つからないように隠れている」

道順の都合で、どうしても化物が屯する場所は避けて通れなかった。ならば強行突破するしかない、と伊勢崎はメリケンサックを装備した。小栗は黙って頷き、近くの物陰に隠れた。

化物の集団に向かって静かに歩み寄る伊勢崎は、眉一つ動かさない冷静さを保っていた。その姿を捉えた化物が集団で奇声をあげる。

さながら地の底から響くようなおぞましい奇声　それすらも伊勢崎にとっては八エが羽ばたく程度の目障りな存在でしかなかった。

いの一歩に襲いかかってきた化物は素手だった。力任せに殴り掛かるうとする相手の腕を取り、そのまま柔道の一本背負いを食らわせる。仰向けになって無防備な顔面に容赦ない鉄拳を叩きつけた。仲間がやられたことで激怒したのだらうか、残りの化物が一斉に襲い掛かる。一対八という圧倒的不利な状況。伊勢崎は今しがた倒したばかりで鮮血が残る化物を躊躇わず持ち上げた。両脚を自分の脇に挟む格好で、そのまま身体を回転させる。ちょうどハンマー投げのフォームに似た格好だ。

伊勢崎によって振り回された化物によって、その同胞がなぎ倒さ

れる様は壯観だった。頭蓋骨とその他の骨が衝突することで鈍い音が響き、化物の声にならない断末魔が木霊する。地に伏してもまだ息がある相手には、さらなる追撃を仕掛ける。抱えた化物をまるで杵の如く扱い、動かなくなるまで執拗に叩きつける。

わずか数分で、その場所は血の匂いによって満たされた。

「おい、もう出てきてもいいぞ」

一仕事終えた伊勢崎は、今まで物陰に身を潜めていた小栗を呼んだ。彼は少し引いた様子だった。

「ちよつとやりすぎじゃないですか？」

「そう言うな。俺だって楽しんでるわけじゃない」

言葉通り、小栗から見た伊勢崎の表情はとても晴れやかには見えなかった。むしろ実に胸糞が悪そうな印象だった。

一息ついて、伊勢崎は呟く。

「……こいつらも元は人間だ。化物に変えたクソ野郎が、この村のどこかに存在するはずだ。俺は」

そこまで言いかけて伊勢崎はお茶を濁した。早く行くぞ、と小栗に肩を貸して先に進んだ。

伊勢崎の記憶は正しかった。区長の家には迷うことなく辿り着くことができた。中に化物がいなか注意して忍び込むと、拍子抜けするほど早く電話は見つかった。

しっかりと繋がっていることを確認して、壁のメモに書かれている番号へ手当たり次第に電話かけた。

しばらくは応答がなく諦めかけたが、ついに繋がった。

「はい、こちら嵯峨病院です」

研ぎ澄まされたような女性の声だった。

伊勢崎直哉 二日目 10時11分44秒 西暮棚集落（後書き）

アーカイブ？9 電話番号の書かれたメモ帳

解説

西暮棚集落の区長宅の電話付近に張られたいたメモ帳。

嵯峨病院、駐在所、鬼守小学校など村内の主要施設の電話番号が書かれている。

嵯峨文字 二日目 10時53分12秒 嵯峨病院

終了条件 駐在所への到達

「はい、それでは鎖条峠で落ち合いしましょう。ええ、弾丸はこちらで探しますのでご心配なく。ではこれで」

約七分の通話を終えて、嵯峨病院の院長である嵯峨文字は受話器を置いた。相手は伊勢崎という男で、彼もまたこの村の怪異に巻き込まれた一人だった。村の人間としては数少ない生き残りである嵯峨は、彼から頼まれて物資の調達を請け負ったのだ。

今の村において安全と言える場所は非常に少ない。この嵯峨病院内にも異形の存在がすでに侵入している。嵯峨が今いる部屋は院長室で、病棟とは別の棟にある。化物の脅威はまだ及んでいない。

そのため、嵯峨は冷静に現在の状況を整理することができた。村の人間で生き残りは、今のところ確認できているは自分だけだ。皮肉なことに余所者の生存率が高い。先ほどの電話で、伊勢崎は二人で行動していると言っていた。そしてもう一人、この場に余所者がいる。

二時間ほど前に院内に逃げ込んできた女 小西理子だ。

「いやあ、今の電話、伊勢崎さんですよ？ だったらもう安心ですよ。あの人強いですから、本当に。さっさと合流しましょうよ、早く。行きましようよ、院長さん」

伊勢崎との通話中も、小西はこのように一人で盛り上がっていた。院内で化物に追われているところを助けたのだが、その時は静かだった。それが食事を摂ると途端に口数が多くなった。聞いてもいないのに自分のことを話して、さらには嵯峨に対してもあれこれと質問を繰り返した。寡黙な嵯峨はそれを持て余し、ほとんど相槌を打っているだけだった。

シニヨンの髪形と縁無し眼鏡が理知的な印象を醸し出す、四十路

の嵯峨。

茶髪のワンリングスに少々とぼけた容姿を持つ、成人から一年目の小西。

この二人で会話が成り立つ方が不思議だ。そうやって自分を納得させて、嵯峨は咳払いをする。立ち上がり、傍にあった白衣を羽織る。

「行きましようか、小西さん」

無駄にテンションが高い小西の肩を叩く。そして部屋の隅に飾られている猟銃に手を伸ばす。先代の院長　嵯峨文子の父が遺したものだ。撃ち方は若いころに習っていた。箱から銃弾を取り出して白衣のポケットに仕舞った。

小西にはゴルフクラブを手渡した。ここに来た際の彼女の持ち物は、汚いカーボーイハット、経済学の本、リコーダー、発煙筒、燐寸だった。どのように村を移動すればこのような意味不明な手持ちになるのか嵯峨には理解不能だった。

年代物のわりに丈夫なゴルフクラブを貰い、小西は上機嫌だった。顎に手を当てて、ゴルフクラブを垂直に構えた。何やら呟いているが、面倒になった嵯峨はそれを無視した。

「この棟から外に出るには、病棟を通過しないといけないから、私に後に続いてください。化物が襲ってきたら、躊躇わずに倒してください」

事務的な口調で説明して、猟銃に弾を込める。装弾数は五発。それを含めた残弾数は二十四発。少ない数ではないが、化物が復活するという性質を持っていることを考えれば心もとない。無駄撃ちは避けなければならない。

院長室の扉を開き、猟銃を構えた嵯峨が先行する。やはりこの棟には化物の姿はない。渡り廊下でつながる病棟に密集していそうね、と嵯峨は解釈した。

渡り廊下を通過して、病棟に足を踏み入れたところで後ろを振り返る。小西はゴルフクラブを片手で持ち、空いた手で麻袋を後生大

事そうに抱えていた。その表情は先ほどと変わることがない。この窮地においても取り乱さない姿勢に、のん気な人ね、と嵯峨は感心するより呆れた。

病棟は三階建てで、二人は今二階にいる。階段は一つしか設けられていないので、おのずと脱出経路は固定されてしまう。周囲に意識を集中させるように嵯峨は指示した。

病室の前を通過しようとした時、不意に耳障りな奇声が出た。開け放たれた病室に潜んでいた化物が発したものだ。看護婦服に身を包んだ化物は、不気味な笑みを浮かべて二人に迫った。

それに対する嵯峨の対応は実に冷徹だった。怪奇に巻き込まれるまでは共に病院の職員だった相手の額を、猟銃の先端で槍のように突き。怯んだところに足払いを仕掛けた。仰向けになった化物の口内に銃口を突き入れて情け容赦なく引鉄を引いた。

飛び散る血と脳みその破片が周囲に散らばり、それは当然ながら小西の身体にも付着する。顔面が脳髄まみれになった彼女はさすがに嫌だったのか、装填中の嵯峨に抗議した。

「ちょっと、先生、これってひどくないですか？」

「大丈夫よ、化物の血は基本的に無害なようだから。注意するのは赤い水だけで十分」

生理的なことで抗議する小西に対して、嵯峨は実害的なことを説明して宥めようと試みた。馬鹿らしい会話だ。長続きはせずに、どちらともなく折れて先に進むこととした。

ハンカチで顔を拭きながら、小西は嵯峨に尋ねる。

「先生は、同僚さんでも化物になったら殺すんですか？」

余所者である小西からすれば生き延びるために、村の住人だった化物を殺すことにはあまり抵抗がない。それは関係のない相手に対して冷淡になれるということだ。

しかし嵯峨の場合は立場が異なる。彼女は村の住人である。怪奇が発生する以前には院長として村人からも頼りにされていた。顔見知りを手に掛ける。それについて抵抗はないのだろうか。

「……ないわよ、抵抗なんて」

一瞬だけ迷いを見せたが、それでも嵯峨はそう断言した。今の村で、そのような余計な情を抱いていては自分の身が危ない。嵯峨は自分に言い聞かせた。

返事を聞いた小西は、少々残念そうにしながら、それでも仕方がないことだと思った。

「やっぱりそうですよね。襲ってくるのに、こっただけ手を出しちゃう駄目なんて不公平ですよね……」

ここに辿り着くまでに小西も化物を手に掛けていた。それでも一切の抵抗がなかったわけではない。時折、彼女は考えていた。化物となっても、自分たちを襲ってきてても、それでもどこかに人間としての心が残っているのではないかと。

だが、それを確かめる術は存在しない。少なくとも小西にはどうすることもできないことだ。

無力感で動きが鈍った小西の代わりに、猟銃を持った嵯峨は容赦なく化物を駆逐した。複数に囲まれる状況となっても、彼女は慌てずに応戦した。

病院からの脱出、そして駐在所に至るまで嵯峨は一人で戦った。

「これが銃弾ね」

駐在所のロッカーに、銃弾は収納されていた。拳銃の姿がないことから考えて、これで間違いないだろう。

嵯峨は小西に命じて、駐在所の内部を隈なく探索させた。ぶつぶつと文句を言いつつも、ここまで何も活躍できなかった小西はその通りに動いた。

使えそうな物がいくつもあった。警棒、鉛筆、メモ帳、そして飲料水のペットボトルが三本。

それらを麻袋に入れて、小西は嵯峨に声をかけた。

「先生、これから鎖条峠つてところですかあ？」

「ええ、そうよ。早く行きましょう」

この場で休むという選択肢を、嵯峨はあえて避けた。この宵次集

落は化物の巢窟と化しつつあるからだ。明らからに数多い。まるで  
何かに呼び寄せられているかのようだ。

二人は再び歩き出す。鎖条峠へ向かって。

嵯峨文字 二日目 10時53分12秒 嵯峨病院（後書き）

武器アーカイブ？ 43 猟銃

強さ 非常に強い

分類 銃器

詳細 装弾数五発

武器アーカイブ？ 16 警棒

強さ 普通

分類 軽い打撃武器

詳細 特になし

アーカイブ？ 17 嵯峨病院の職員名簿

解説

嵯峨病院の全職員の名前が記されている。一番上に、嵯峨文字、と読み取れるだけで、それから下は血で汚れて読めない。

職員数は四人とされている。男はいない。

終了条件 頭脳屍<sup>フレイム</sup>人の撃退

すでに使い物にならなくなったスコップを投げ捨て、人気のない納屋に隠れた酒井はさらにヘルメットも脱ぎ捨てた。防具として役立つだろうと考えていたが、これが非常に邪魔だった。その質量によって頭が常に揺さぶられるような感覚に襲われるのだ。

藁に横たわった酒井は強烈な眠気に襲われた。このままではいけないと思い、慌てて身体を起こす。立ち上がった瞬間に目眩がした。彼はすでに丸一日寝ていない。疲労の蓄積による一過性の貧血だった。

ここで睡眠を取れば楽になれるだろう。しかしそれはハイリスクな選択だ。意識の無い状態で襲われれば反撃することもできず命を奪われる可能性が高いからだ。

睡眠時間と命 考えるまでもなく酒井にとって大切なのは後者だった。

身体を動かしていれば眠気は誤魔化せる。そう考えて酒井は納屋を出た。周辺を適当に見渡すと、薪置き場に一本の鉈が無造作に転がっていた。刃の部分がやや擦り減っているものの、試しに薪を割ってみると問題なく役割を果たした。

ため息をついてから状態を反らす酒井。これまでの出来事を振り返って、何か異形の存在に弱点はないか考える。最初に思いついたのは動きの緩慢さだった。関節が錆びびついているかのように動作にキレが無く、まるで機械のようだ。もう一つは、知能が低いことだ。簡単な陽動にも誘われて、すぐに罠に引っ掛かるほどお頭が弱い。

対して長所となるのは、その打たれ強さだろう。スコップで不意打ちをしても、何事もなかったかのように反撃に転じる姿には何度も肝を冷やした。さらには倒しても一定時間で復活する。完全に身

体を破壊でもしない限り、何度でも蘇るのだ。

酒井は口元を緩めた。

「馬鹿だからって、それでも最低限の知能はあるようだな。同じ行動を繰り返すだけだと思っていたら、急にパターンが変わったこともある。まさか、誰かが命令を下しているのか？」

何となく口にしたことだが、それは強ち間違いでもないかもしれない。蜂などが女王蜂を中心として群れを築くように、化物たちをまとめる存在がいる可能性がある。

これは盲点だった。酒井は鉈を握りしめた。司令塔を潰せば、それに従っているだけの化物は烏合の衆と化す。それどころか動きを止めるかもしれない。

あるいは自分の勘違いかもしれない。それでもこの窮地から逃れるために、今の酒井は手段など選ぶつもりはなかった。仮に間違いだったとしても、誰かに笑われるわけでもない。

「笑われることはないんだよな」

一瞬、脳裏に嫌な記憶が過った。それを打ち払い、重たい足取りで集落でも家屋が密集する場所へ向かう。

集落の中心部だというのに、化物の姿は意外にも少なかった。だが酒井は樂觀視しなかった。むしろ危険だと彼は感じていた。

これは化物の数が少ないのではない。最低限の数で集落全体を監視しているのだ。酒井はそう推測した。少し前から気になっていたのだが、明らかに化物の行動がするパターンが効率の良いものになっている。

やはり司令塔となる化物がいる。酒井はそう確信した。

「そいつを潰せば、連中は大人しくなるだろうな」

鉈を握る力がより一層強くなる。まずは集落全体を見晴らせる場所を確保すべく、彼は中腰の姿勢で駆けた。しばらくすると、火の見櫓と思われる錆びた建築物が視界に入った。恐らくあれが一番高い場所だろう。発見されないように注意を払いつつも、できる限り急いだ。

赤錆で汚れた梯子を上り、火の見櫓から集落を見渡す。家屋が密集しているものの、大まかな地理は把握できた。化物たちの場所もこの中に司令塔としての役割を果たしている奴がいるはずだが、それを見分けることはできなかった。

舌打ちして手摺を叩こうとした時だった。目が覚めるような銃声が近くでした。弾丸は、ちょうど火の見櫓の梯子に当たったようだが酒井は即座に身体を屈ませた。迂闊だった自分を呪った。高所から見渡せば視界は広がるが、それは同時に自分の姿を化物にさらしていることにもなるのだ。火の見櫓から降りるためには梯子を使わなければならない。そうなると狙い撃ちされる危険性が高い。

やはり睡眠不足では頭が満足に回転しない。それなりに自分が知的だと自負している酒井だが、今回ばかりは失策を認めざるを得なかった。

そうしている間にも銃声は止まない。酒井は装弾数を確認するため、黙って銃声を聞き続けた。銃声ができる感覚から、装弾数は五発だろう、と彼は予測した。

ならば弾を込める隙を狙って降りればいい。酒井は心してその瞬間を待った。

「よし、今だな」

火の見櫓の高さは約五メートル。降りる際のことを考えて、先に鉈を放り投げた。改めて自分が降りようとする、直後に銃声があった。

ここで被弾すれば致命傷は避けられない。そう考えた酒井はまだ梯子の途中だというにも関わらず飛び降りることを選択した。

「くそお」

何とか骨は衝撃に耐えきることができた。それでも痺れは治まらない。長時間の正座から解放された直後のように上手く歩くことができない。鉈を回収して民家に逃げ込むだけで精一杯だった。

廊下を這うような姿勢で居間に辿り着いた。幸運にも化物の姿はなかった。酒井は一息つくために壁に身体を預けた。

安堵した直後、逆らい難い眠気が酒井を襲った。見えない力によつて瞼を閉じられるような感覚には、ゆっくりと眠りに落ちるような心地よさがまったくない。落ちるなどという生易しいものではない、突き落とさるといふ表現が正しい。

しばらく抗った酒井だが、このまま成り行きに身を任せることも悪くない、と甘美な誘惑にすべてを委ねようと考えた。このまま無理をして起きていても、また先ほどのような失敗をしまえば意味が無い。ならばここは頭を休ませるべきだろう。

このまま横になろう、と酒井はベルトを緩めた。シャツのボタンを外して首元を自由にした。

「な、何だ？」

まさに眠りに落ちようとしたところで、廊下から物音がした。明らかに足音だった。化物が侵入してきたのだ。

危つく無防備な姿を晒すところだった。酒井は鉈を握り、ゆつくりと障子を開いた。廊下の隅に、麦わら帽子を被った化物が背中を向けていた。

音を立てないように慎重に背後から忍び寄る酒井。あと数歩で攻撃が届く範囲まで近づいた。すると化物が機敏な動きで振り返った。これまでにないほどキレのある動きに酒井は驚かされたが、それ以上に化物の外見に対して衝撃を受けた。明らかにそれはこれまでとは異なっていた。

顔が潰れていたのだ。顔面がフジツボのような腫物に覆われていたと言ったほうが正しい。

機敏な反応と、明らかに異なる外見。そして化物はさらに酒井を驚かせた。これまでの化物は例外なく人間を発見すると襲い掛かってきたにも関わらず、この化物だけは逆に逃亡を試みたのだ。

この廊下を通らなければ外へ出られないこともあって、化物は酒井に突進した。突き倒されそうになりながら、最後の力を振り絞る酒井。力士の取り組みのように一歩も譲らない両者。それでも丸腰の相手に対して鉈を持つ酒井に軍配が上がった。

後頭部を鉈の背で殴打すること数回。機能を停止した化物を、酒井は汚物を放るるように床に叩きつけた。服に付着した汚れを払い、一目散に外へ出る。

化物の姿を探す酒井。しかし発見した化物はすべて倒れた状態だった。

「やっぱり、あいつが司令塔だったのか」

自分の考えの正しさが証明されたことで、少々傲慢な酒井は喜ばずにいられなかった。これで心置きなく眠ることができる。

完全な安眠を確保するために、念には念を入れる。酒井は先ほどの民家に逆戻りして、まだ鮮血が残る化物の身体を躊躇わずに鉈で分解した。

薪を割るための鉈は、人体を分断するに適していた。

酒井善一 二日目 12時33分41秒 東暮棚集落(後書き)

武器アーカイブ? 31 鉈

強さ 強い

分類 重い打撃武器

詳細 特になし

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0656n/>

---

SIREN -Spin-out-

2011年11月10日00時14分発行